

巻頭言

## 「食」から「暮らしまるごと」を支える地域づくりへ

牧野 斉子 (センター事業団事業推進本部事務局長/ふくろう子ども食堂/会員)

高校生の頃、「食べることは、誰でも一生関わる」ことだと考え、栄養士になると決めた。大学の保健所実習では、地域向けの栄養教室などを体験し、教室終了後、地域に自主グループが無数に出来ていることを知った。保健所の指導栄養士が、「住民に対して栄養士の数は、圧倒的に少ないので、自主的に活動する住民の活動を支援し継続させ、どうすれば自分たちで健康に暮らしていけるのかを伝えることが大切。」と、話していたことが印象に残っている。

学生時代のアルバイト先だったセンター事業団。面接の時に、理念やパンフレット等で詳しく説明を聞くと、衣食住、暮らすこと、働くこと、地域課題の解決を地域住民と行い、地域づくりにつなげていた。自分は地域へのアプローチを食からだけしか考えていなかったが、自分のやりたいことはこれだと感じ入職を決めた。

入職後は、清掃現場や介護現場を担当しながら理念と現実の狭間で揺らぎ紆余曲折ありながらも、今はみんなのふくろう食堂という社会連帯活動によって、「食」から「暮らしまるごと」を支える地域づくりへ向かっていると

実感する日々である。

2016年4月から「食べることに困っている子どもたちへ食べるものを届けたい」という思いで始まった子ども食堂。蓋を開けてみると中間層の乳幼児の親子で一杯だった。今では、毎回平均80人の親子が参加する場になっている。その当時から参加している乳児は、この4月から幼稚園に入った。ママたちと一緒に成長を喜ぶとともに、月日のながれを感じる。最近では、一人親家庭、外国籍の方、障がいのある方などさまざまな生きづらさを抱えた方たちも参加し始めている。多重な困難を抱えている場合が多く、専門機関や他子ども食堂などと連携しながら継続して関わりを持ち続け、地域で見守るようにしている。

現在、豊島区内には14か所の子ども食堂があり、区の子ども若者課が事務局となり「としま子ども食堂ネットワーク」を運営している。3か月に1回集まり情報共有や研修などを行っている。

その中で、「夏休み明けの子どもが痩せている」ということが話題に上がり、学校が休みで給食がなく食事が満足に食べていないことを実感した。こ

の問題を解消しようと、地域の子ども食堂とこの問題に関心のある地域住民とで「TOSHIMA TABLE」という任意団体を作り、一人親家庭を対象に「フードパントリー」を実施してきた。昨年度は、長期休み前後で全10回、教会やスーパー、センター事業団本部で開催してきた。今では、一人親家庭の親子がボランティアとして関わり、食料品の提供だけでなくカフェや日用品、こども服のリサイクルなど運営にも参加している。

またこの秋からは、東京都と豊島区から補助金を受け「フードパントリー設置事業」が始まる。区内の生活困窮世帯に毎月1回以上の食料品の提供を行う予定。食料品の提供のみでなく、レシピの提供や一緒に調理をして食べる場にしていきたいと考えている。イメージは、いつでも食べるものがある「みんなの冷蔵庫」。安心して食べられる場所にしたい。

さらに、この9月から東京都在住外国人支援事業の助成を受け、豊島区の全世帯の10%を占める外国籍の人たちへの「食」を切り口とした居場所づくりを開始予定である。

みんなのふくろう食堂などの「食」

の居場所が、地域で広がり、そこからネットワークが生まれ新たな人たちが関わりつながる。その結節点から、新たな課題や活動が生まれていく過程を体験している。この活動が、誰もが住みやすい地域づくりへと向かっていると実感する場面が増えてきている。

ネットワークのメンバーは、自治体、社協、企業、NPO、地域住民などである。それぞれの役割の違いを認識し理解し合い、それぞれの強みを活かし地域課題を解決していく仕組みを作ろうと「としまみんなの円卓会議」を始めた。この会議の話し合いや取り組みの過程で、市民が地域課題を自分事として捉え始め、まちづくりへの参加を促せるのではないかと手ごたえを感じている。

先日、この会議のメンバーでキックオフミーティングを行った。子ども食堂で提供されているカレーと一緒に食べたりして、盛り上がった。近々、正式に第1回目を開催予定で準備を始めている。今後、地域の多様な主体が、それぞれの力や課題を共有しながら、対話と協同労働を積み重ねながら地域課題を解決する糸口を見つけていけたらと思っている。

以上